

2/17  
福

# 無料・低額診療 県内の現場 ①

## 生活苦、逃げ道は「死」

低年金の高齢者が生活が苦しい人の医療費を減免する「無料・低額診療事業」が、県内でも行われている。2014年度には実施医療機関が2施設から8施設とになって、それに伴い利用者も増える傾向にある。「年金貧乏」「逃げ道は死ぬことだけ」。利用者の切実な声からは、憲法にうたわれた「健康で文化的な最低限度の生活」から程遠い現実がにじむ。

(西脇和宏)

福井市の男性(74)は2014年 妻は08年ごろに重い糖尿病にな  
脊狭心症で救急搬送されて手術を 受けた。退院後も毎月通院し薬を 飲み続ける必要があった。無料・低 額診療事業で医療費が免除される 前は、薬がなくなっても1カ月以上 病院に行かず、年金の振り込みを 待って受診することが度々あった。 認知症の妻(75)と2人暮らし で、男性が家事を全て担っている。 子どもや頼れる親族はいない。理 容師をしながら妻の世話をしてい たが、60歳を過ぎたのを機に退職 した。保険料などを引かれると、 年金は夫婦で月額計8万5千円ほ ぼ。働いていたころの蓄えはす ぐになくなった。ころごと死んで

も自分の葬式もない」

妻は08年ごろに重い糖尿病にな り、血糖値を抑えるインスリン注射 が欠かせない。薬代は無料、低額診 療事業の対象外で、夫婦2人分の 薬代がのしかかる。食費を切り詰 めて何とか毎月1万円は貯金して いるが、税金や車検の支払いで全 て消える。「足が痛くて近くのス ーパーにも行けない。金がかかる が車を手放せば死んだのも同じ」 昨年4月に妻が腰を痛め、身動 きができなくなった。ベッドに尿 や大便を垂れ流す様子に不安が募 り、初めて介護保険の保険証を取 得したが、サービスはまだ使って いない。「いまは自分が世話でき

## 低年金、自己負担払えず



無料・低額診療事業を利用している男性は「苦しい生活を何とか抜け出したい」と話す＝福井市の光陽生協クリニック

るし、金もかかる。先のことは考 えないようにしているが、眠れな いときもあるよ」

重い高血圧を患っている福井市 の男性(67)は、通院時に窓口で支 払う2千円前後がなかった。「恥 を忍んで、ちょっと待ってもらえ るか」と頼んでいた。毎週金曜と 土曜に飲食店に血洗いなどのアル バイトに出かけ、日払いで3千円 をもらうと、そのうち千円ずつ遅 れて病院に払った。 月額約8万円の年金は、税金や 家賃、光熱費、食費でほとんど消 え、財布に入っているのはいつも 1500円ほど。スーパーで10 0円台の特売品を探し回り、なけ れば何も買わずに帰ってくる。 4年余り前にながんで妻を亡く し、妻の分の年金がなくなると、 生活が一気に苦しくなった。妻は 2年8カ月の闘病中、高額な抗がん剤治療を受けた。払いきれなかつた当時の費用を返し続けている。 昨年末、ベッドから体を動かせ ないほどの激しい腹痛に襲われ、 胆石症と診断された。医師から大 きな病院での緊急入院を勧められ たが、その場では拒んだ。代わり に処方してもらった薬で不思議と 痛みは治まった。病気を抱えてア ルバイトを続ける日々、心が沈む。「苦しい生活から早く逃げたい。一番簡単なのは死ねばいい。頭のどこかでずっと考えている」

無料・低額診療事業 社会福祉法に基づく事業の一つで、医療機関が都道府県などに届け出て実施する。医療機関ごとに対象者の基準を設け、医療費を一定期間、無料か、または減額する。県内では県民医連に加盟している光陽生協クリニック(福井市)など6施設と、県済生会病院(同)、松原病院(同)で行っている。厚生労働省は2001年に「必要性が薄らいでいる」として新規の事業開始を抑制する通知を出したが、非正規労働者や失業者の増加などを踏まえ、08年に撤回した。